

【資料紹介】

中華世界の民間版画

—天理参考館所蔵資料を中心に—

Chinese Popular Prints in Tenri University Sankokan Museum

中尾 徳仁

NAKAO Norihito

1. はじめに

中国大陸や台湾の庶民が、生活の中で使用・消費していた印刷物を総称して「中国民間版画」（以下、民間版画）という。筆者が所属する天理参考館（以下、当館）はこれらを約 500 点所蔵しており、本稿ではその一部を紹介する。なお、当館は海外民族資料をはじめ、考古美術資料、日本民俗資料、交通資料など約 20 万点を所蔵・展示する博物館である。

民間版画は、大きいものはタタミ一畳くらいから、小さなものは郵便切手くらいのものである。かつては多くが木版印刷だったが、半世紀前頃から石版印刷によるものが主になり、近年はほとんどが樹脂板印刷やオフセット印刷である。民間版画は浮世絵のような単なる鑑賞用の版画ではない。その用途は幅広く、礼拝の対象である神像図から室内装飾の吉祥画、菓子や線香の包み紙、遊具、壁紙や刺繍の型紙までも含む。しかし同じ木版印刷で作られていても經典や書籍は別のジャンルに分類し、民間版画からは除外して考えられている。

分類方法には諸説あるが、本稿では、張道一「中国民間木版画—その概念と分類の試み」『日中台国際シンポジウム論文集 封印を解かれた中国民間版画』（日本民藝館、1997年）に基づく分類を用いる。張は上記論文において、民間版画を門画・祭糊・神像図・紙馬・年画・窓画・燈画・幡画・挿図・印記・遊芸・その他の 12 分類に分けることを提案している。

民間版画は専業の版画職人が制作するもの以外に、農民などが農閑期を利用して制作するものがある。その販売方法は「専門の工房・画店を設けて売る」、「祭祀用品店で版画以外の商品と共に売る」等があるが、民間版画が最も多く消費される時期が旧暦の年末から正月であることから、新年を控えた市や廟会（各寺廟で行われる縁日）の露店で売る方法が、かつては最も一般的だった。

年末に売り出される民間版画の代表的なものが、「年画」（部屋を装飾する。吉祥図や物語の図）や「門画」（門扉に貼る。家を守る「門神」や吉祥をもたらす天官・仙女・童子の図）、「神像図」（天地三界の神、財神、竈神など）である。また以前は、願いを込めて焼く「紙馬」や「紙銭」（金紙・銀紙など）、祭事・葬儀に使う紙の作り物

図1 大門（表門）に貼られた門神図



(2006年 江蘇省南通にて筆者撮影)

(これを「^{きつこ}糺糊」という)にも民間版画が多数使用されていた。

近年、その使用量は著しく減少したが、引き続き日常的に消費されているものもある。例えば玄関扉に前述の「門画」が貼られている姿は、中国大陸や台湾などで広く見られる(図1)。そのほとんどはオフセット印刷の門画で、中には企業名や商品名が入れられたものもある。宣伝用に企業が配布したのだろうか。このように形態は多少変化しながらも、民間版画は生活の一部となっている。決して「既に消え去った文化」ではない。

さて、民間版画についての記述は、宋代に書かれた孟元老『東京夢華録』(北宋時代の都である開封の繁栄ぶりを追懐した随筆)で既に見られる。その他にも19世紀末に記された敦崇『燕京歳時記』(北京とその周辺地域の歳時記)、永尾龍造『支那民俗誌』(民俗学視点から中国の風俗を記録したもの)など、幾つかの文献が散見される。しかし、20世紀初期の時点では、まだ系統立った研究は少なかったようだ。瀧本弘之によると、早期に発表された研究として最も注目すべきは、美術研究所編『支那古板畫圖録』(1932)に収録された黒田源次「支那板畫史概観」と同「^こ姑蘇板」の二本の論文であるという。その理由は、今日通説化しているいくつかの見解が、上記論文で初めて提起されたことによる。筆者の黒田源次[1886-1957]は後に奈良国立博物館館長となる人物で、その研究分野は版画のみに留まらず多岐にわたる。

20世紀中頃以降は王樹村、馮驥才、潘元石、楊永智、三山陵、瀧本弘之らが、それぞれ優れた研究成果を発表している。特筆すべきは、馮驥才総主編による『中国木版年画集成』全22巻(中華書局、2005-2011)であろう。

各巻は地域別にまとめられており、当該地域の版画写真や、版画職人へのインタビュー記事等が見られる。特に、従来は版画の産地として無名であった地域も含めて取材し、詳しく紹介したことは注目に値する。

この集成は、中国の国家プロジェクト「中国木版年画抢救与保護工作」(以下、「工作」)の成果をまとめたものである。本「工作」は、中国国家社会科学基金の委嘱を受けた中国民間文藝家協会(中国文学藝術界聯合会の下部組織)により、2002年から約10年の歳月を費やして進められた。総主編の馮驥才は中国民間文藝家協会主席で、2012年現在も精力的に民間版画の研究や保存活動を続けている。

また、上記集成の大きな特徴として、『日本藏品巻』と『俄囉斯(ロシア)巻』を含む点が挙げられる。それまで中国大陸や台湾以外にある民間版画について詳細に述べた文献は僅かであったため、この試みは民間版画研究にとって大きな進歩である。『日本藏品巻』を編集した三山陵によると、2011年時点で日本国内において確認できた中国民間版画は約2,200点(ただし1945年以前に制作された木版印刷物に限る)で、このうち博物館・美術館・図書館の所蔵は約1,800点、個人による所蔵は約400点であるという。

『日本藏品巻』に資料が掲載されている施設は、海の見える杜美術館(広島県)、早稲田大学図書館(東京都)、秋田市立赤れんが郷土館(秋田県)、名古屋大学附属図書館(愛知県)、神戸市立博物館(兵庫県)、町田市立国際版画美術館(東京都)、大和文華館(奈良県)、東洋民俗博物館(奈良県)、静岡市立芹沢銈介美術館(静岡県)、高麗美術館(京都府)で、本稿で紹介する天理参考館の所蔵資料も6点掲載されている。

2. 資料の紹介

以下では当館所蔵の民間版画を、張道一が提案する分類別に紹介する。筆者は各分類の正確な点

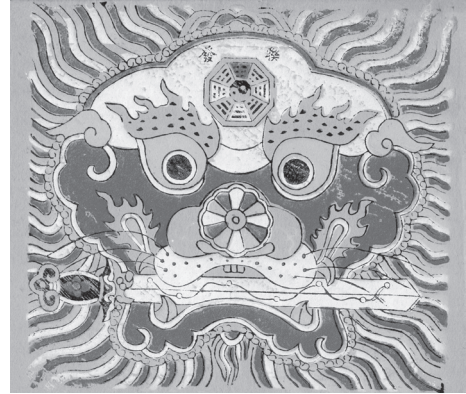
図 2



図 3



図 4



数を出すことを試みたが、区分けが曖昧な版画もあり、現時点では概数しか把握できていない。ただし、分類作業を進めた結果、当館には門画、祭糊、神像図、紙馬、年画が比較的多いこと、窓画、燈画、幡画、挿図、印記、遊芸、その他の分類に属する資料が非常に少ないことが明らかになったので、ここでは所蔵数の多い5分類の版画を中心に採り上げる。

1) 門画^{もんが}

門扉に貼る民間版画を総称して「門画」という。門画を貼る目的は、魔除けと吉祥祈願である。

年末に、通りに面した門（大門）に貼る門画を「門神図」という。門神は歴史上や物語上の勇猛な武将で、武器を持ち、家を魔物から守るといわれる。門を入った中庭の門や家の入口や部屋の扉には「天官図」（天の役人が福を授ける図）や「門童図」（子どもの吉祥図）などを貼る。若い夫婦の部屋の扉には「麒麟送子図」（瑞獣の麒麟が優秀な男児を運んでくる図）などを貼って子孫繁栄を祈る。衣裳入れなど家具の扉にも門画を貼る。

大門は観音開きの二枚扉が多いため、門神図は二枚一組である。名前に「神」と付くが礼拝の対象ではない。地方によっては、武将ではなく虎の図を貼る。虎は魔物を捕って食うとされ、魔除けの力を持つ。

図 2 尉遲敬徳 20 世紀前半、天津市楊柳青 版の天地 155.1 cm

図 3 秦叔宝 20 世紀前半、天津市楊柳青 版の天地 155.0 cm

図 2、図 3 は大型の門神図。尉遲敬徳と秦叔宝は唐の皇帝太宗 [598-649] に仕えた実在の武将で、双方共に武器である金瓜（先端が瓜の形をした長い杖）を持っている。尉遲敬徳は、現在の新疆ウイグル自治区ホータン出身の胡人（西域の人）とも言われ、赤ら顔で濃い髭が特徴である。

図 4 獅頭啣劍 19 世紀末、台南米街 版の天地 20.8 cm

台南の祭祀用品店「吳聯發」で制作されたもの。災いが家に入るのを防ぐため、門の上に渡した横木や玄関の上などに貼る。百獣の王である強い獅子の額に太極八卦を描き、口に七星宝剣をくわえさせることにより、更に神秘的な迫力が感じられる図柄となっている。

図 5



図 6



図 7



図 8



2) 紮糊

紮糊は「紙紮」ともいう。細く割った竹や高粱ガラで骨組を作り、それに紙を貼り付けて作った物の総称である。紮糊の種類は広範で、大きなものは人が出入りできる建物やアーチなどから、小さなものでは扇子などがある。凧もこれに含まれる。

神への供物である「天公燈座」と「七娘媽亭」なども紮糊に属す。天公燈座は道教の高位の神である玉皇皇帝（天公）を祀るときの供物で、作り物の中心部に神像図を貼り、周りは印刷した紙で装飾を施す。礼拝が終わると燃やして天に送る（この行為を「焚化」という）。先祖や死者に供える紮糊もあり、同様に燃やして冥界に送る。紮糊に使用する印刷物は多種多様で、礼拝する神によって使うものが異なり、地域ごとの特色もある。

図 5 七娘媽亭 1984年、台南 高 136.0 cm

台南の祭祀用品店「慶祥糊紙店」で制作されたもの。成人儀礼に使用する紮糊で、女神「七娘夫人」を祀る社をかたどっている。男女共に子供が十六歳になる年の旧暦七月七日が近づくと、両親はその制作を祭祀用品店に依頼する。台南では当日、七娘媽亭を廟に持参し、廟の出口付近で両親がその左右を支え持つ。そして、この下を子供が潜って外に出るという儀式を行い、終了後は廟前で焚化する。

本品の各層には銀紙細工の欄干や龍柱（寺廟で使用される龍を象った石製の柱）、さまざまな神像の印刷物の切り抜き等が配されている。

図 6 天公燈座 2011年、鹿港 高 124.5 cm

鹿港の祭祀用品店「同徳發」で制作されたもの。天公の誕生日（旧暦正月九日）や、結婚式の際などに祀られる。鹿港では天公誕生日に、表門の内側を背にする状態で中庭に祭壇を設け、本品を祀る。そして家族全員が正装し、門の内側から外に居る天公に向かって礼拝する。続けて直会（神に捧げた供物を皆で食べること）があり、儀式終了後は本品を中庭で焚化する。

本品は紙のみを貼り合わせて作られている。接着剤は木工用ボンドと小麦粉を混ぜたものが使用されている。下段左右の龍は龍柱、中段左右の武将は門神を表す。上段には八仙人⁽¹⁾、蝶、

図9



図10



図11



鳳凰などの吉祥文様が印刷されている。なお、図柄はすべてオフセット印刷によるものである。

図7 鹿港における天公燈座の設置例。門を背にし、窓の向こう側を外の通りと想定している。天公燈座の前には肉や魚、金紙などが置かれている（鹿港民俗博物館の再現展示。2011年筆者撮影）

3) 神像図^{しんぞうず}

礼拝の対象である。正月には神像図を掛け、祭壇を設けて供物を供える。元旦の未明に新しい年の神を迎え、一家総出で礼拝する。家のそれぞれ決まった位置に神像図（財神、土地神、竈神、水神、牛馬神など）を祀り、一家の主が家族とともに礼拝する。

この他に「百份^{バイフエン}」とよぶ諸神図がある。これは儒教、道教、仏教、民間信仰のあらゆる神を印刷して、百枚に近い数を集めて束ねたものである。安価な紙に簡単な刻線で神像と名前が印刷してある。元旦の諸神を迎える儀式で祭壇に祀り、神迎えが済むと焚化する。

図8 竈神 20世紀前半、華北 版の天地 35.0 cm

竈神は司命之神・竈君・東厨司命などとも呼ばれている。一般的には各家庭の厨房に祀られる。竈神はその家に住む人の善行・悪行を調べ、旧暦十二月二十三日（または二十四日）に天へ昇り、天上の神に彼らの一年間の行動を報告する。それによって翌年の禍福が決まるとされているので、できるだけ良い報告をしてもらうため、昇天する日には供物をささげて竈神を祀る（これを祭竈という）。祭竈では祈りの最後に神像図を燃やして天に送り、大晦日には新しい版画を用意して竈神を迎える。

本品には、竈神の上部に、民国二十五年（1936年）の月（旧暦）の大小と二十四節気が記された略歴が刷り入れられている。二十四節気は農作業の目安になる。

図9 眼光娘娘 20世紀前半、華北 版の天地 28.9 cm

前述の「百份」にあたる神像図。「娘娘」は一般的に女神を表す名称である。眼光娘娘は眼病を治してくれる女神と考えられている。

4) 紙馬^{しば}

「甲馬^{チヤーマー}」、「甲馬子^{チヤーマーツ}」、「神馬^{シエンマー}」などとも呼ぶ。中国明代の通俗小説『水滸伝』には、脚に甲馬を貼

図 12

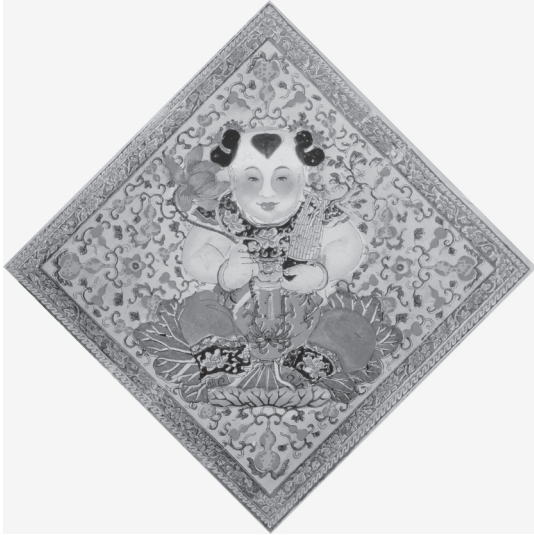


図 13



って一日に八百里を行くという話がある。

正月をはじめ、清明節（春の墓参）、端午節、中元節（お盆）などの行事には、それぞれにふさわしい紙馬を祀って神を迎える。また冠婚葬祭にもさまざまな紙馬が祀られる。これら決まった行事の他に、生活の折々に庶民が必要とする紙馬が用意されている。例えば田植えには水の神や田の神、土地の神を描いた紙馬を祀る。子供が誕生すると、成育を守る神、厄を払う神が祀られる。夜泣きを止める神、熱を下げる神もある。平安を祈願する紙馬、厄除けの紙馬の種類は数限りない。みな願いを込めて焚化する。

図 10 白虎 20 世紀中頃、台湾 版の天地 11.7 cm

「白虎」は最も凶悪な疫病神とされ、もし怒らせて取り憑かれたと感じたら、僧や道士を呼んで白虎を追い出すための儀式を行い、この紙馬を燃やす。その後、籠にご飯・野菜・肉などを入れて野外に置く。

図 11 血神之神 2004 年、雲南省大理 版の天地 13.4 cm

血神は疫病をはやらせる神（疫鬼）とされる。家族が病気になった時、この紙馬を家の中から外に持ち出して焚化し、血神が家から出て行ってくれることを願う。

5) 年画

以前は「花紙」、あるいは単に「画児」とも呼ばれていた。描かれる画の内容は吉祥を祈願するものが多い。美しい女性や元気な子どもたちを觀賞する画もあるが、その基底には吉祥祈願が流れている。吉祥図の他には、芝居や物語の一場面を描いたものも多い。これらは部屋の装飾を兼ねて、観て楽しんだ。時流に合わせた絵柄も売り出されていたようである。また年画には「二十四孝」や「孟母三遷」のような教訓的な内容の画がある。これは「勸戒画」と呼ばれ、年画は教育的な役割も持っている。

年画は軸装して室内に掛けたり、部屋の壁に直接貼る。新年を寿ぐ室内装飾として使われることが多いので、年末に大量に売り出される。軸装になったものは、時期が過ぎると外してまた翌年に

図 14

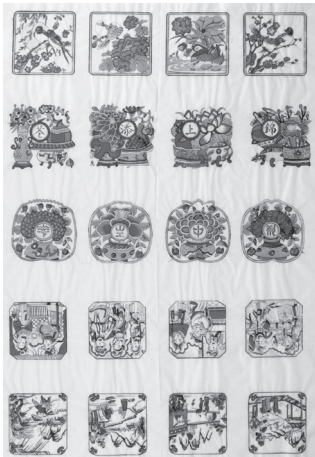
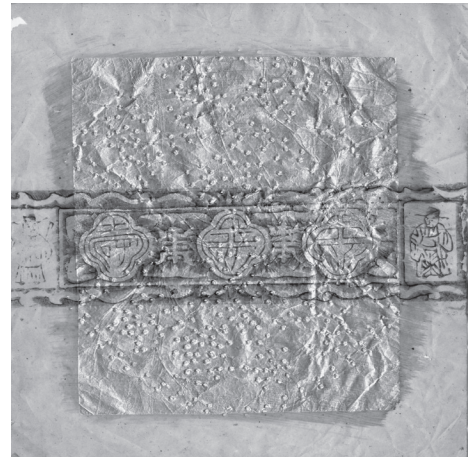


図 15



図 16



使用したと思われるが、壁に貼ったものは汚れたり破れたりするので、新しいものと取り替えられたであろう。

図 12 連生貴子 20 世紀前半、天津市楊柳青 47.3×46.7 cm

若い夫婦の部屋に貼り、優れた男児が沢山生まれることを願う。同時は右手に蓮、左手に笙を持つ。中国語では蓮 = 連、笙 = 生と発音が同じなので「連生貴子」（優れた子が続けて生まれる）の意味になる。

図 13 童楽図 20 世紀後半 天津市楊柳青 版の天地 51.5 cm

子供たちがチャルメラや二胡などの楽器を鳴らす図。植木鉢には太湖石と竹が見える。竹は「祝」と同音のため、本品は吉祥図案となっている。なお、左下に見える「齋健隆」は清代から続く楊柳青の画店名である。

6) 上記以外の分類

「窓画」…新年に窓に貼る小型の版画など。

「燈画」…旧暦の正月 15 日（元宵節）に使用する灯籠、その他に走馬燈に貼る版画など。

「幡画」…祭壇の前面に貼る大きな版画。または門の上部に貼って使用する版画など。

「挿図」…扇の絵を刷ったもの。その他、小説の挿絵・地形図など

「印記」…商業宣伝用のチラシ、商業包装用の版画など。

「遊芸」…紙牌（カルタの一種）、版印を用いた玩具など。

「その他」…上記 11 分類に属さないもの。吉祥符（僻邪、鎮宅平安、求子などを願うお札で、主に道士が作成する）など。

図 14 窓画 20 世紀末期、河北省武強 版の天地 73.2 cm

切り取って障子や窓ガラスに貼る。風景、花鳥、芝居など種々の図柄があり、吉祥句も添えている。上から二段目は吉祥を表す植物（菊や蓮、ザクロ、仏手柑など）に、「錦上添花」（美しい物に、更に美を加える）の句を書く。三段目は牡丹（富貴を象徴）や菊（長寿を表す）が花瓶に活けられ、「瓶中生華」（平安で、豊かで幸せな生活）の文字がある。外枠は吉祥の果物である桃やザクロをかたどっている。



写真1 明清街の建物



写真2 版木を彫る霍慶有氏



写真3 楊立仁氏

図15 張天師符 20世紀中頃、台湾 版の天地 42.5 cm

「その他」に分類される民間版画。後漢 [25-220] に五斗米道^{ことべいどう}という宗教を開いた張陵が、虎に乗った姿で描かれた辟邪のお札。これを廟から持ち帰って室内に貼れば、魔除けの効果があるとされる。

図16 金紙 20世紀前半 推：華北 幅 25.5 cm

図15と同じく「その他」に分類されるもの。神仏を祀る際に使用する。供物と共に金紙を供えて礼拝し、その後、金紙は寺廟に設置された炉などで焼いて神仏に送る。紙に金色の箔を貼っただけのものや、その上に木版を押したもの等がある。オフセット印刷された金紙は現在も広く使用されている。

3. 楊柳青における調査報告

筆者は2012年8月に、天津市楊柳青で中国民間版画に関する調査を行った。以下にその概要を報告する。本調査では、中国有数の民間版画産地である楊柳青に赴いて版画職人を訪問し、民間版画の技法や歴史についての話をついたり、制作過程を撮影することを目的とした。

楊柳青鎮は天津市の西部に位置する。明・清代に鎮の南北に運河が開通したため水運が盛んになり、それに伴って商業が発達した。一説によると、当地域での民間版画制作は明代後期に始まったとされる。清の乾隆帝時代 [在位 1735-1795] には、鎮内をはじめ、その南方に点在する「南郷三十六村」と呼ばれた村々に多くの版画工房が存在した。しかし清末以降は、辛亥革命 (1911-1912)・日中戦争 (1937-1945)・国民党と共産党による内戦 (1945-1948) などの相次ぐ戦乱により、工房や販売店は徐々にその姿を消していく。内戦終了後は一時的に復活の兆しを見せたこともあった。しかし、1966年に文化大革命 (1966-1976) が始まると、民間版画は「四旧」(旧思想・旧文化・旧風俗・旧習慣) であるとされ、紅衛兵に版木をたたき壊されたり、版画職人が職を

奪われて工場労働を強要されるなどの迫害を受けた。これにより当地域の版画工房は大打撃を被り、以後は版画職人や販売店はほとんど見られなくなった。また、楊柳青は天津市中心部に比較的近いことから大規模な再開発が行われた。このため古い工房や店舗などは一部を除き全て取り壊されてしまい、往年の姿を偲ぶことはできない。現在その跡地には高層マンションが建ち並ぶ。工房を追われた職人の中にはその代償としてマンションの一室を支給され、やむなくそこに移り住んだ人も多かったようだ。



写真4 「南趙庄」の現状。建物は全て撤去されて平地になっている。周辺には建ち並ぶ高層マンションの姿が見える。

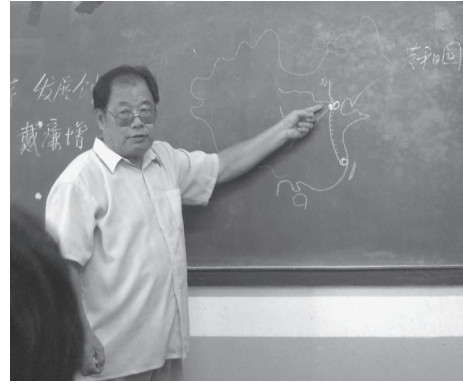


写真5 講義をする張茂之氏

近年は中国政府の伝統文化保存政策による補助金等もあり、民間版画は楊柳青の観光資源として復活しつつある。鎮内を流れる運河沿いの「明清街」には、清末民初時代の商家風の外観を持つ建物（三階建てのビル群、写真1）があり、一階部分には民間版画や凧などを扱う土産店などがテナントとして入っている。付近には民間版画を展示する「楊柳青年画館」もあり、観光客の姿も見られた。

今回筆者が訪問した職人達は、前述の度重なる戦乱と楊柳青の変遷を体験した、いわば楊柳青の「生き証人」とも言うべき方々である。調査当日は楊柳青在住の版画研究家である姜彦文氏と、北京在住の版画家である橋爪佳子氏に同行して頂き、7名の版画職人（王学勤・霍慶有・霍慶順・陳志南・房荫楓・楊立仁・楊鵬）と、歴史研究家の張茂之氏に話を伺った。このうち3名について簡単に紹介する。

霍慶有氏（写真2）は現在60歳前後。明清街付近にある三階建てのビルで工房「玉成号画荘」を営む版画職人である。一階は工房となっており、版画の制作風景を見ることができる。ここでは完成品の購入も可能である。二階は霍氏が収集した貴重な版木・版画などを展示するギャラリーになっている。

楊立仁氏（写真3）は現在90歳前後で、版画工房「義成永画荘」第六代目の職人である。楊氏が若い頃、「義成永画荘」は常時20名の職人を雇うほどの盛況ぶりであったという。しかし文化大革命時に版木を没収され、その後はしばらく版画制作を休止した。「義成永画荘」は2011年まで、前述の「南郷三十六村」の一村である南趙庄にあった。しかしこちらも楊柳青と同じく再開発の対象地域となって建物が取り壊されてしまい（写真4）、2012年現在は楊柳青にあるマンションの一室で暮らしている。数年前から孫にあたる楊鵬氏が立仁氏の指導を受け、「義成永画荘」第八代目の版画職人として活躍している。なお、楊立仁氏に20世紀前期に楊柳青で制作された当館版画資料（本稿の図2と図3）について尋ねると、このデザインの版画はかつて「義成永画荘」で制作した記憶があるとの返答を頂いた。

張茂之氏（写真5）は現在80歳前後である。学校や教育委員会で勤務していたが、退職後は大学の非常勤講師などをしている。彼は1950年代より現在まで、長年にわたり南郷三十六村を調査してきた。その成果である著書「楊柳青南三十六村画業興衰史略」（『津西文史資料選編』第五冊、1991年発行）は、南郷三十六村研究における最も基本的な文献とされる。当日は楊柳青鎮教育委員会の施設で張氏と面会した。その際、90分にわたり自身の研究成果を講義形式で語って頂いた。

4. おわりに

本稿では当館所蔵資料を例に挙げて中国民間版画の概要を紹介した。既に述べたとおり民間版画は単なる観賞用の版画ではなく、庶民の生活に密着したさまざまな使用方法を持つものである。故にここでは版画の技法には深く踏み込まず、具体的な「使用法」に注目して各資料を解説した。

清代に各地で盛んになった民間版画の制作は、相次ぐ戦乱や文化大革命などで打撃を受け、徐々に姿を消していった。2012年現在では民間版画を制作・販売する職人や店舗数はごく僅かである。彼らの高齢化は進み、後継者も少ない。その状況を伝え聞いた筆者は、まだ職人が健在なうちに民間版画の産地を調査し、実物を収集しておきたいと考えた。そこで2012年10月現在までに、山東省楊家埠、江蘇省の蘇州桃花塢と南通、陝西省鳳翔、チベット自治区のラサ、四川省綿竹、雲南省大理、台南、鹿港などを訪れ、民間版画に関する調査を行った。前述の楊柳青における調査もその一環である。これまでの成果として「雲南省大理における紙馬収集について」『中国版画研究』第5号(2007)、「蘇州桃花塢と南通の民間版画工房」『天理参考館報』第20号(2007)、「天公燈座と七娘媽亭」『天理参考館報』第25号(2012)等がある。2011年には天理参考館に於いて「中華世界の民間版画 一招福の祈り」展を開催し、約50点の民間版画資料を展示した。しかし筆者の中国民間版画研究はまだ始まったばかりであり、課題は多く積み残されている。今後も当館所蔵資料の分析とフィールドワークを継続し、更に研究を深めていきたい。

最後になったが、天津市楊柳青の調査および本稿をまとめるにあたり、以下の方々から多くのご指導とご協力を得た。記して感謝の意を表したい。

安娜・王学勤・霍慶順・霍慶有・姜彦文・徐呈瑞・瀧本弘之・張茂之・陳志南・橋爪佳子・房荫楓・三山陵・楊永智・楊鵬・楊立仁(五十音順、敬称略)

注

(1) 道教の数ある仙人の中で、特に庶民の信仰が篤い八名の仙人。李鉄拐、鍾離権、呂洞賓、藍采和、韓湘子、何仙姑、張果老、曹国舅とされることが多いが、諸説がある。位置付けは日本の七福神と似ており、八仙図が祝賀や正月などの飾りとして用いられることもある。

参考文献

- 黒田源次「支那板畫史概観」「姑蘇板」『美術研究資料第一輯 支那古板畫圖録』美術研究所、1932年
永尾龍造『支那民俗誌 第一巻』支那民俗誌刊行会、1940年
敦崇著 小野勝年訳『燕京歳時記』平凡社、1967年
張茂之「楊柳青南三十六村画業興衰史略」『津西文史資料選編 第五冊』中国人民政治協商会議天津市西郊区委員会・文史工作委員会、1991年
孟元老著 入矢義高・梅原郁訳注『東京夢華録 宋代の都市と生活』平凡社、1996年
張道一「中国民間木版画 一その概念と分類の試み」『日中台国際シンポジウム論文集 封印を解かれた中国民間版画』日本民藝館、1997年
中尾徳仁『中華世界の民間版画 一招福の祈り』天理参考館第64回企画展展示図録(学)天理大学出版部、2011年
馮驥才主編『中国木版年画集成 日本蔵品巻』中華書局、2011年